

山下勝利
yamashita katsutoshi



カードの欠けた家族合わせ

カードの欠けた家族合わせ

山下勝利

yamashita katsutoshi

朝日新聞社

カードの欠けた家族合わせ

1991年5月1日 第1刷発行

著 者 山下勝利
発行者 木下秀男
印刷所 凸版印刷
製本所 青柳製本
発行所 朝日新聞社

編集・図書編集室 販売・出版販売部

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-3545-0131 (代表) 振替・東京0-1730

©Katutoshi Yamashita 1991 ISBN4-02-256282-X Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

カードの欠けた家族合わせ*目次

妻の寝顔	7
夫の背中	18
恋の勝利者	31
居心地のいい場所	44
愚かな夢	57
究極の選択	70
仮面舞踏会	82
ジェラシー	94

不倫願望

106

別の生活

119

温泉饅頭

132

最高の恋人

145

執行猶予

158

結婚記念日

171

サヨナラの同義語

184

離婚ごっこ

197

装幀・菊地信義
装画・阪口笑子

カードの欠けた家族合わせ

初出誌*「月刊Asahi」
'89年6月号から'90年9月号まで連載

妻の寝顔

男が自宅のある郊外の駅から乗って四十分。やっと、電車は都心のターミナル駅に近付いて速度を落とした。

今日の午前中はスポンサー回りと会社伝えてあったので、それをいいことに男が家を出たのはいつもより三十分遅かった。朝のラッシュが収まった後だからか、車内はいくぶん空いていた。それでも吊り革にぶら下がるような格好で立っているサラリーマンも多い。座っている連中もみんな一様に疲れた顔をして目を閉じているか、手にしたスポーツ紙にぼんやりと視線を向けていた。乗り込んできたときから、べちゃくちやしゃべり通しなのは若いOL風の二人連れだけだ。

まわりの溼ぬんだような空気が、うっとうしい梅雨空のせいだけでないことは、男にもよく分かっていた。出勤時間の車内は毎日こんなものだ。

窓から外をのぞくと、家を出るときにはあがっていた雨がまた降り出したようだ。男が鞆から折り畳みの傘を取り出すと、向かい側の席に座っていた中年の男が、雨に気づいたからか、それとも束の間のまどろみが終わったことに腹を立てたのか、小さく舌打ちをして足を組み替えた。

分かるよ、おじさん、その気持ち。オレだってこんな日は宮仕えの身がつくづく恨めしいもの。

男は心の中でそう呼びかけてから、思わず苦笑した。おじさんといっても、相手も自分と同じくらいの年齢だ。自分が若いつもりになったのは、今夜のちょっと気の弾む約束が頭にあるからだろう。

頬の緩みを気づかれないようにうつむくと、相手の足元が目に入った。紺のズボンと黒い靴の間をつなぐ茶色の靴下。ときどき見かける中年サラリーマンらしいファッションだ。紺の背広にそれなりのネクタイとまでは気がまわるのだが、靴下は忘れてしまう。忘れるというよりも、服に合った靴下がないといったほうが正しいかもしれない。

こんな梅雨どきとはとくにそうだ。洗濯が間に合わない。妻に出されたものを履くしかない。男にもそんな経験がある。

そのうえ、おかしなことに貰い物の靴下というのは、なぜか紺と茶とグレイの三点セットと決まっている。茶色の背広なんて滅多にないから、いきおいリリーフでの登板となるわけだ。

それも履いたときはいい。立っていればズボンと靴でほとんど見えない。腰を下ろして足首を晒したときが惨めだ。

男はそんなことを考えながら、茶色い靴下を見つめていた。それにはご丁寧にもたっぷり毛玉まで付いていた。何度も水を潜らせているとどうしてもこうなる。毛玉の先には細かい白の糸屑が絡んでいる。多分、肌着と一緒に洗濯機に放り込まれたからだろう。

男はそっと自分の足元に目をやった。白いゴミ状のものこそないが、毛玉のほうは負けてはいない。かなり目立つ。

これが、お父さんが引きずっている家庭の現実ってやつかな。

なんとなく座席の下に足を引き寄せた男は、取り出した傘のカバーを外して、もう一度苦笑した。黒い袋から出てきたのは濃紺の傘だったからだ。

手元の暗い場所で妻が入れ間違えたのだろう。こんなことはちよくちよくある。社内の草野球大会に参加したとき、スパイクの代わりにゴルフシューズをバッグに詰められたこともある。あのときに較べれば害はない。

男はカバーを急いでポケットにしまった。なにも慌てることはなかったのだが、最近感じている自分たち夫婦のずれを、目の前に突きつけられたような気がしたからだ。

似たような色の、傘とカバー。他人が見れば気がつかないだろう。当たり前の取り合わせだ。傘とカバーで通る。が、厳密に見れば色合いや素材が異なるようにサイズだって違う。カ

バーのほうが大きすぎる。端から見て納得できるものでも、本人にしてみれば、この差はひっかかる。

まるでオレたち夫婦みたいだ。

男は自嘲気味に胸の中でつぶやいた。



三日前のことだ。男が家に戻ったのは午前一時を回っていた。民放テレビ局の営業課長という仕事は、勤務時間があってないようなものだ。朝は早いくせに終わりの時間がはつきりしない。スポンサーの意向とあれば、いつまでも付き合う必要がある。

もっとも、男はこの仕事が嫌いではなかった。番組や企画を売るといえば聞こえはいいが、時間という目に見えないものを売るといふかがわしさが、いかにも時代を象徴しているような気がするからだった。

時代の先端を行っているようでいて、その実、古い体質の企業であることも、男のように四十を過ぎてみると、かえって居心地がよかった。新しいものが億劫な年齢になっていたともいえる。

その夜、男は例によって接待の帰りだった。スポンサーの担当者二人を案内して、銀座の小料理屋で軽く飲みながら食事した後にバーを二軒はしご。下手なカラオケに付き合ったうえ、シュークリームの箱を土産に持たせてハイヤーを呼ぶ。これがいつもの接待パターンだった。

これで仕事がうまくいくのなら、どうってことはない。

もともと酒の好きな男にとって、これまではこうしたバカげたセレモニーもそれほど苦になる時間ではなかった。自分も一緒になって騒いで、座を盛り上げるのを得意にしていた。あの営業マンはなかなか面白い奴だと、スポンサーに可愛がられてきた。

それが最近では面倒で仕方がない。四十二歳という年のせいだろうか、気分が乗らない。酒がうまくない。とくに自分より年下の若い担当者が、当たり前のようにして乗り込んだクルマを見送ると、どっと疲れが出るのを意識するようになっていた。

これまでならば、一人になった後か、または社の同僚が一緒でも、必ず口直しと称して一杯やったものだ。それくらいの元気はあった。それで胸の奥にたまったものを消してから帰路についた。

ところが、その晩の男は中途半端な酔いのままタクシー乗り場の行列に並んだ。飲み直す気がなかった。

三十分ほど待ったろうか、十二時を過ぎた頃になって男が行列の先頭に立ったとき、後ろから声を掛けられた。

よかった、会えて。ね、本当に赤坂まで送ってくださるの？

振り返ると、最後に寄ったバーの女性が立っていた。そういえば、そんな約束をした覚えがある。クルマが拾えない時間だから、近くなら送ってやる。タクシー乗り場にいるから来れば

いいと。

ずいぶん待ったでしょう。ごめんなさいね。でも、課長さんって、優しいんだ。感激しちゃうな。

男が先頭に立っていたのを待っていたと誤解した女は、そう言って腕を絡ませてきた。いまさら忘れていたとも言えない男は、黙っているしかなかった。

今日はお友だちと約束しちゃってるから駄目だし、明日、明後日はお稽古でしょ、その次の日なら私、サボれるからデートしようよ。ね、いいでしょ。

女は小さな劇団に所属する役者の卵で、店にはアルバイトで通っていた。目鼻立ちがはつきりしているうえ、アルコールが入ると妙に色っぽくなるところがあり、店でも人気があった。年はたしか二十二、三のはずだ。そんな女性から誘われれば悪い気はしない。

うん、金曜日か。めしでも食いに行くか。

男はその場は軽い調子で応じた。先程までとは違って、気持ちもいくぶん軽くなっていた。現金なものだ。

女を送ってから家に戻ると、男は真っ直ぐ冷蔵庫に向かった。今頃になって一杯やりたくなっていたからだ。若い女の一言が男を変えていた。思いもかけぬ成り行きに祝杯をあげよう。そうだ、オレだって、老けこむには早すぎる。この家のローンにしても、まだ十三年も残っている。考えれば気の遠くなるような数字だ。子どもも中学と小学校。ガンバラなくっちゃ。

冷蔵庫の中にビールは冷えていたものの、肝心の栓抜きが見当たらない。家では減多に飲まないし、たまに飲むときは妻にビールと言えは栓の抜かれたものが出てくる。

うろろしている、男は台所のどこになにがあるのか、まったく知らないことに気付いた。それはなにも台所に限らない。家の中のことはほとんどなにも分からない。

妻が友人に、この人は私がいなければ、お茶をいれるどころか着替えも満足にできないと言うのを聞いたことがあるが、当たってはいなくもない。

男はそれでいいと思ってやってきた。家の中ぐらい亭主関白を気取らせてくれ。

それにしても栓抜きのないのには参った。目の前にあるものが飲めないとなると、よけい喉の渴きを感じる。そばにあるといっても水やパックの牛乳では代用できない渴きだ。

あちこち捜し回って、食器戸棚の引き出しを開けると、電話局から男宛てにきたハガキが目についた。先月分の料金が銀行口座から引き落としできませんとある。

おいおい、月の半ばにしてウチは文なしなのかい？

これは妻の管轄だ。ハガキは見なかったことにして元に戻しておこうとしたとき、奥に銀行からの封筒が突っ込んであるのに気がついた。これも男宛てになっている。開けてみると中に入っていたのは、定期預金の解約書だった。

まさか。この二百万はいざというときのためのもの。息子と娘の進学に用意したものだ。なぜこんなに金に困っているのか。男の胸に疑惑が生じた。ほかに男でもいるのだろうか。

情けないことに最初に浮かんだ疑惑がそれだった。

六歳下の妻とは結婚して十四年になる。これまで一度もそんな疑いを持ったことはない。自分は潔白と言い切れないにもかかわらず、妻はそうしたこととは無縁の人間だと、勝手に思い込んでいた。しかし、もし、そうでないとしたら……。

そういえばこのところ妻の外出が多いようだ。先日夕方電話をしたときに不在だった。子どもも行く先を知らなかった。あのときは気にもとめなかったが。

妻に経済的な感覚が乏しいところがあるのは知っている。結婚して三年目のことだったか、妻は男が大事にしていたカメラを内緒で質屋に入れたことがあった。

それを知った男が尋ねると、けろりとした口調で来月のボーナスで出すからと言う。出す出さないの問題じゃない。金をどこに使ったのかと詰問すると、男の母親に還暦祝いの着物を贈ったと。あのときは怒るに怒れなかったのを覚えている。

しかし、今度は額が大きすぎる。解約したのは一週間前だが、使い途に思い当たることもない。株か、ギャンブルか、それとも。

封筒を握ったまま男が夫婦の寝室に入って行くと、スタンドの小さな明かりの中で妻は眠っていた。なんの屈託もないような規則正しい寝息が洩れてくる。男は初めて見るようにして妻の寝顔に見入った。

考えてみれば枕こそ並べているが、妻の寝顔を見た記憶はない。朝は妻のほうが早いし、夜